

# 展示室での視覚障がい者の取り組みについて

福井市自然史博物館分館（セーレンプラネット） 企画・交流 山口菜摘

## 1. はじめに

福井市自然史博物館分館（セーレンプラネット）は、2016年4月28日にJR福井駅から徒歩2分ほどの場所にある商業施設の中に新しくできた博物館である。

ドームシアター（プラネタリウム）と展示室があり、宇宙や天文について学ぶことができる。来館者は子どもからお年寄りまで幅広く、障がい者の利用もある。しかし、視覚障がい者の利用はそれほど多くない状況である。

視覚障がい者にもっと博物館を気軽に利用してもらうにはどうしたら良いかと考え、2019年6月30日に福井県立盲学校で行われた、NPO法人 福井芸術・文化フォーラム主催「～視覚や聴覚に障害のある人が文化施設に安心して来られるための～アクセシビリティ研修」（以下、研修とする）に参加し、視覚障がい者の対応について学ぶことができた。

本発表ではこの研修をきっかけに地域の団体や大学等と連携をし、展示室で実施した視覚障がい者に対する取り組みについて紹介する。

## 2. 展示室での視覚障がい者に対する取り組み

2019年10月14日に、視覚障がい者向けの企画「プラネットツアー - 触って、匂って、宇宙を知ろう -」（以下、プラネットツアーとする）を実施した。

この企画は、NPO法人 福井芸術・文化フォーラム1名、福井大学 国際地域学部の学生4名や福井県立盲学校1名と協力することで実施した。プラネットツアーは、学生1名と視覚障がい者1名が2人1組のペアとなり、手引き[1]をしながら展示室を歩行するというものである。

なお、本企画は福井大学 国際地域学部の授業「課題探求プロジェクト（PBL）」[2]の一環として実施した。

### 1) プラネットツアー実施前の工夫

プラネットツアーの実施にあたり、視覚障がい者の中でも弱視（low vision）の方が来館した場合の対応を想定し、どのような配慮が必要なのか、どのような内容だと楽しんでもらえるのかを検討した。

配慮については、手引きをする上でのルートや展示室内での危険箇所を確認し、スタッフ間で共有をした。加えて、プラネットツアーの時間は10時～15時までとし、途中で5分程度の休憩を挟むことで、参加者の負担にならないようにした。また、より多くの視覚障がい者にイベントの情報が伝わるように、2種のチラシ(図1)を製作し配布した。2種ともカラー印刷とし、そのうちの1つは、背景を黒色、文字は黄色及び白色とすることで、弱視の方にも認知されやすいデザインとした。また、知ってほしい情報だけを載せ、文字も出来るだけ大きく目立つよう工夫した。

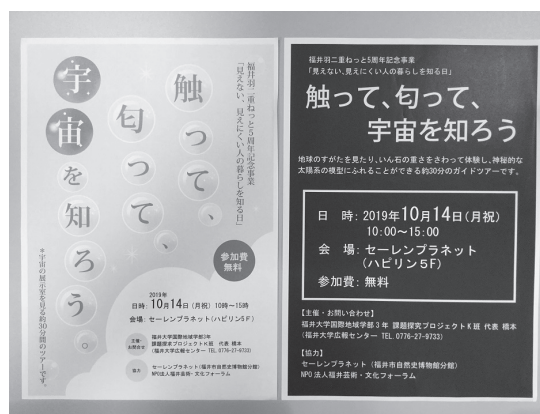


図1 プラネットツアーのチラシ2種

## 2) 実施当日の様子

実施当日は受付を行った参加者から随時スタッフとともに展示室へと移動をし、プラネットツアーを行った。一般の方が参加する場合は、視野を狭くする眼鏡をつけ、弱視の見え方を体験してもらった。

また、手引き歩行だけではなく、展示物に合わせた簡単な声かけを行った。スタッフは展示室に数名常時巡回しており、参加者から天文や宇宙に関する質問があった場合に対応できるようにした。

## 3. プラネットツアーを終えて

今回、プラネットツアーを初めて実施したことによって、さまざまな面からの発見や今後の課題が見つかった。

### 1) 丁寧な声かけの必要性

プラネットツアーを行う際に、最も気をつけたのは、手引き時に、視覚障がい者の目の前にどのようなものがあるのか声をかけたり、安心をさせるために展示物を一緒に触ったりする等、参加者を不安にさせない対応を行ったことである。唐突に説明をするのではなく、必ず挨拶をし、視覚障がい者がスタッフを認識したことを確認したのち、展示物の説明を、ゆっくりと話すようにした。

その結果、参加者を驚かせることなく、楽しんでプラネットツアーに参加できたとの声が聞かれた。スタッフ一人一人が丁寧な声かけを実施することで、視覚障がい者でも安心して博物館を利用できていた。

また、新たな課題や発見もあった。宇宙の映像を楽しめる展示物を解説する際に「あれ」「これ」等の指示語を使うと、何を示しているのか分かりにくいとの声も聞かれた。

このことから、当たり前と思っていることでも見えにくい人にとっては当たり前ではないということに気づくことができた。

今後の課題として、視覚障がい者がより楽しめ、安心して宇宙や天文について学べる場にするためには、展示物の解説時に視覚障がい者が想像しやすいように具体的かつ、丁寧な言葉かけができるように検討していきたい。

## 2) 五感を使った展示物の楽しさ

プラネットツアーの参加者は、視覚障がい者 17 名と一般 3 名を合わせた 20 名であった。最後にフィードバックとして、アンケートを以下の 3 つの観点から行った。

- ・プラネットツアーの感想
- ・普段文化施設に行くことはあるか
- ・また、セーレンプラネットに来館したいか

表 1 プラネットツアーの感想（抜粋）

性別	年齢	弱視/全盲/一般	感想
男性	6 才	弱視	・触る、匂いを嗅げる展示物があり、楽しめた。
男性	50 代	弱視	・模型を触ることにより、木星が大きくて、重い星というのが分かった。
男性	70 代	弱視	・自分一人で鑑賞するより、スタッフがいてくれたおかげで詳しく知れた。
男性	50 代	全盲	・手で触れることで、音声ガイドや解説で頭の中の想像と重ねることができた。
女性	60 代	全盲	・宇宙に興味が無かったが、模型があることで理解でき、興味をもてた。
女性	20 代	一般	・視覚障がいの方が実際に惑星の模型に触れている姿を見て、工夫を行えば障がい関係なしに誰でも楽しむことができるのだと感じた。

プラネットツアーの感想では、触覚や嗅覚を使った展示に関する回答が多く、触った後にスタッフから更に説明を聞くと、頭の中で重ねることができるといった回答が多かった。

このような参加者の感想から触る・嗅ぐ・聴くといった五感を使った展示物がより楽しめることが分かった。現在は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、接触を伴う展示物については制限があることも想定されるが、今後対策をとった上で単に眺めるだけでない楽しめる展示構成を検討

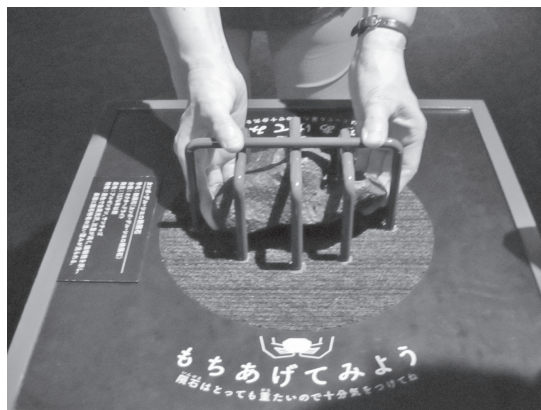


図 2 参加者が隕石を触る様子

していきたい。

## 4. 現在の取り組みについて

研修とプラネットツアーで学んだことを活かし、以下の3つの取り組みを行った。

### 1) スタッフ研修

研修で学んだことをスタッフで共有した。プラネットツアー同様2人1組のペアになり、視覚障がい者役はアイマスクをつけ視界が遮られた状態で、展示室を手引き歩行した。展示物の前では展示物を触り、介助者役が簡単な解説をした。

#### 手引きの方法（例）

- ① 視覚障がい者の近くに立ち、相手を驚かせない程度に挨拶をする
- ② 介助が必要かを確認する
- ③ 手引きは右手と左手のどちらが良いか尋ねる
- ④ 手引きをする場合は、印籠を持つように相手の腕を優しく掴む
- ⑤ 動くことを伝え、ゆっくりと歩行する
- ⑥ 歩行している時は、相手が不安にならないように声かけをしながら歩く
- ⑦ 介助が終了したら、挨拶をして終わる

このスタッフ研修後でも、新たな課題を認識することができた。例えば、右に方向転換をする際に「右に曲がります」では、どの程度右に曲がれば良いのかわかりにくいため「右へ90度曲がります」等と細かく声かけをした方がわかりやすいという意見が出るなど、取り組みを行うたびに様々な発見があり、手引き歩行について更に認識を深めることができた。

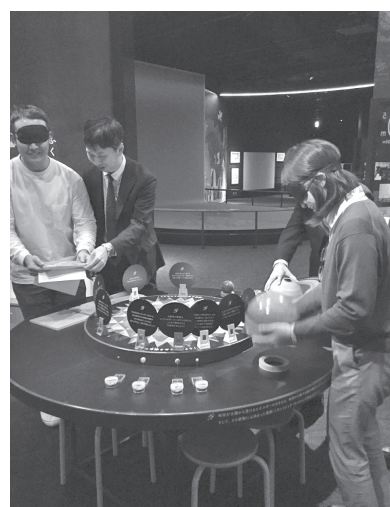


図3 スタッフ研修

### 2) 福井県立盲学校の学習投映

2020年9月に福井県立盲学校の生徒が来館し、ドームシアターで学習を行った。生徒は全盲1名の他、弱視数名という構成であった。生徒に合わせた投映内容を実施するため、教員と打ち合わせを行い、視覚・聴覚・触覚を使った投映プログラムを実施することとした。

学習投映中、生徒が想像しやすいように、投映している風景等を解説の中で取り入れるようにしたり、惑星模型（図4）や星座点字（触れると星と線の盛り上がり分かる資料）（図5）を取り入れた。視覚だけではなく、聴覚や触覚で工夫を施すと視覚障がい者が楽しみながら宇宙や天文について学べる場が更に広がることに気づくことができた。

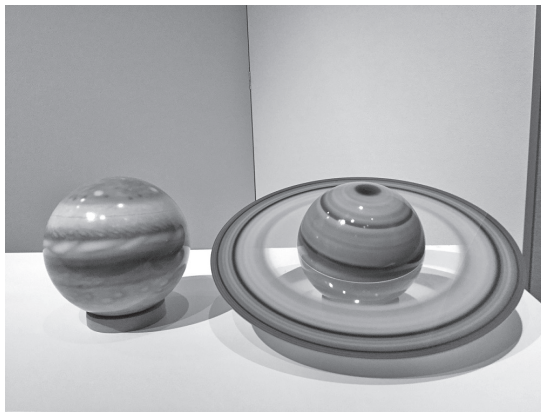


図4 惑星模型

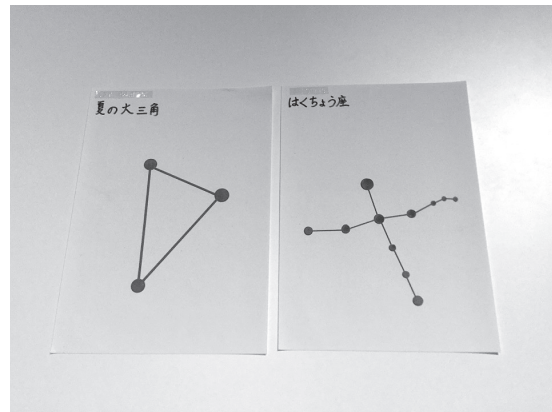


図5 星座点字

### 3) 高校生等ボランティア体験講座

2020年12月20日に福井市社会福祉協議会と連携して、高校生等ボランティア体験講座「スマホアプリを活用して「文化・情報のバリアフリーを学ぶ」」を行った。この講座ではスマートフォンに搭載されている、アクセシビリティ機能を使い、自分たちにできるボランティア活動を考え、実践をしていくことを目的としている。

この講座において、これまでの事例を紹介した。加えて、展示物を白濁・視野狭窄の眼鏡だけを使って体験するだけでなく、スマートフォン等を使用して展示物を見るという新たな試みを行った。スマートフォン等の中には展示物の解説文を拡大したり、白黒反転させ見やすくすることができるものもあるので、参加者は視覚障がい者の目線に立って、考えることができたと思われる。高校生にもなじみ深い端末を用いることによって、視覚障がい者をより身近に感じてもらうことができた。

## 5. おわりに

2021年は東京オリンピック・パラリンピックの開催が予定され、2018年には「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」[3]の施行、福井県内では2018年に「障害のある人もない人も幸せに暮らせる福井県共生社会条例」[4]が施行されたこともあり、今後改めて障がい者について考えていくことが必要である。文化施設を利用したいとの意思を持っているが、社会的障壁があることによって、利用できない方もいるのではないだろうか。

さまざまな取り組みをきっかけに少しずつ私たちの意識から変えていき、一般の方にも講座やイベントで視覚障がい者を知ってもらうことが重要である。私たちの姿勢が少し変わるだけでも、視覚障がい者にとって利用しやすい博物館の実現が可能となるのではないだろうか。博物館を利用する方が笑顔で帰って頂けるような取り組みを今後も行っていきたい。

---

## 参考文献

- [1] 見えない人こそ よくみえる 視覚障害者ガイドヘルプの手引き  
第四章 移動介助の基礎知識から
- [2] 福井大学国際地域学部 課題探求プロジェクト (PBL)  
<http://www.gcs.u-fukui.ac.jp/feature/curriculum/>
- [3] 障害者による文化芸術活動の推進に関する法律  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/geijutsu\\_bunka/shogaisha\\_bunkageijutsu/1406260.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/1406260.html)
- [4] 障害のある人もない人も幸せに暮らせる福井県共生社会条例  
<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/shougai/fukushikeikaku/jyoreikouhu.html>